

12) 骨髄移植後の間質性肺炎の2例

松本 康男・斎藤 眞理
 小林 普一・清水 克英 (県立がんセンター)
 新妻 新二 (新潟病院放射線科)
 内海 治郎・笹崎 義博
 浅見 恵子 (同 小児科)

前処置に 13.2 Gy の TBI を施行した骨髄移植例 2 例に間質性肺炎 (IP) を経験した。症例 1 は 13 才の ALL の男児。骨髄移植後 85 日目より微熱みられるようになり 92 日目に撮影された胸部 X-p にて、両肺辺縁性の広範な浸潤影を認めた。CT 上も肺泡性主体の像を呈していたが、パルス療法にて陰影は間質性主体の像となり 2 か月半後には完全に消失した。症例 2 は 12 才の女児で CML 急性転化型。2 回目の急性転化後、骨髄移植が行われた。移植後 35 日目頃より咳嗽みられるようになり、胸部 X-p では両下肺野末梢に淡い異常陰影を認めた。CT では両肺に粒状からスリガラス状の濃度領域を認めた。IP に対する治療は行なわれていないが、陰影はゆっくりと吸収傾向を認めた。骨髄移植後発生する IP は様々な要因が関与する。TBI もその 1 つである。過去の 12 Gy の TBI 施行例には IP は認められなかった。

13) 軟部血管腫の MRI

湯川 貴男・樋口 健史
 木村 元政・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
 松月 由子・梅津 尚男 (荘内病院放射線科)

軟部組織に発生した血管腫 7 例の MRI 所見をまとめた。

1. 形態は分葉傾向を示す類球形または不整形を呈した。
2. T2 強調画像では水と同程度の very high intensity を呈するものが多かった。
3. T1 強調画像では筋肉に比し iso からやや high intensity を呈し、Gd による造影では強く造影されるものが多かった。
4. PD 強調画像では筋肉より high, 脂肪より low intensity を呈した。
5. 静脈系などの石灰化は類円形の無信号域としてみられた。

以上のような特徴的所見を示すので、特異的所見を得ることの少ない軟部腫瘍の中で、特異的診断の可能な病変と考えられた。

14) 胃ポリープの1例

小川 亨 (小川医院)

15) 経過観察中悪性化した胃腺腫の検討

吉村 宣彦・佐藤 敏輝 (厚生連中央総合)
 原 敬治 (病院放射線科)

胃腺腫経過観察中に Group V が検出された 15 症例 16 病変について検討した。扁平隆起と陥凹を有する病変に分けられ、いずれも経過観察中に肉眼形態に変化はみられなかった。扁平隆起のうち 2 cm 以下の病変は全て粘膜内癌であった。3 cm 以上の病変のなかにはリンパ節転移を有した粘膜下層癌が 1 例あった。このような病変では生検時に異型度の低い部分しか採取されなかった可能性が考えられた。陥凹を有した症例では経過観察期間が短かったものがあつた。

症例数が少なく経過観察期間も個々の症例で異なったため比較はできないが、腺腫として経過観察された 2 cm 以下の扁平隆起は進行が遅いと考えられたが、大きい病変や陥凹を有する病変では注意深い経過観察が必要と考えられた。

16) CT による十二指腸傍乳頭憩室の検討

酒井 達也・山田 八郎 (厚生連佐渡総合)
 岩田 文英 (病院内科)

CT による十二指腸傍乳頭部憩室の存在診断の可能性を探り胆石症との関係を検討した。1991 年 7 月から翌年 7 月までに当院で撮像されたすべての上腹部ルーチン CT 1488 件を対象とし (1) CT と ERCP を対応させた 75 例 (2) CT で憩室を認めた 35 例 (3) CT 後に胆石症の手術を施行した 45 例を抽出した。CT により憩室は十二指腸壁外に突出する空気像として示現され、憩室の存在は陽性予測値 100 % 陰性予測値 93 % で診断可能であった。憩室と総胆管との位置関係によって憩室は 4 型に分類され各々の有胆石率に差を認めた。手術を施行した胆嚢結石の 30.6 %、胆管結石の 62.5 % に憩室を認めた。ルーチン CT で傍乳頭部憩室の有無を正確に診断することが可能であり治療方針決定上有用であることが示された。